



八代集抄

古今契別
羈旅物名
四

特別
イ 4
3163
104(4)





わらふにちや
君はる世はやる世を
おねさされ石の岩
保しあるまじく
あゝまゝにちや

る世はちやわら
やちよとちよとよ
はちよとちよとよ
小石細石と云はる
すゝまを所らば
とひすゝまを所らば
をさゝまを所らば

おねさされ石の岩
あるまじく
あゝまゝにちや
わらふにちや
君はる世はやる世を
おねさされ石の岩
保しあるまじく
あゝまゝにちや

古今和歌集卷第七

賀正

新古今集 後人志す

わらふにちやわらふにちや
おねさされ石の岩
保しあるまじく
あゝまゝにちや
わらふにちや
君はる世はやる世を
おねさされ石の岩
保しあるまじく
あゝまゝにちや



いとほふすも月
 花ももる月日は
 とも光るに花え
 る春はすももる
 はまもるもくも
 春日サとく晩春の
 詩の心月一なり
 一乃時の事ももる月
 月にかりももる月
 一乃時説なり
 本康 仁明第七一品
 武丁の号八条宮延
 喜元年荒母松屋下
 紀静子名虎女口説

花乃花のちるももる人乃花
 乃るももるももる
 花乃花のちるももる
 乃るももるももる
 花乃花のちるももる
 乃るももるももる
 花乃花のちるももる
 乃るももるももる

春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる

春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる
 春くれいやはももる

よきの代をさつさ
 悪代をさつさ
 いふつと云ね
 を待つよきなり

内侍のクナ
尚侍満子内太子ルヤニナヒを養育延喜聖王ヲ
延喜十七年從二位

すなはちね乃にねまわりのうち
 の
 空うむすめあまをうてよふ
 け
 うせい清一

より代をまらふう君を返いつ
ちとせりうげりすまんといへ
内侍のふち大將が原野の

大將殿原初旨
大納言大將定宝延
喜六年、同拜七月薨
四

春日野よりわらふつみ
まは日野より草を
つみよとてかたし祓ふ
心は神に知りんぞと
毛詩セウ頌ハ世をわめ
て祓ふつるよりと
祓ふあり祓祓は
よきことと信じよと
山よりやうなる人
心のゆくへあるは花
をやいさぬ之百モト
船

四十賀志々々時々四季乃三々
るうろ乃屏風よなまじりたる
うゝ

春日野よりみちをたづねてよるつよを
いふらるるを神うきしん
山をみちをたづねてよるつよを
いふらるるを神うきしん

あきこゝろあきこゝろは都云
こゝろをあらすい何ぞ

多らわれいふもの山乃

古今和歌集巻第八

離別

五七

在原行平朝臣

とよりわれいふもの

多らわれいふもの山乃

とよりわれいふもの

よめとてきくそいふもの

山乃因幡の山乃

よめ人志

はれいふもの

すゝあき秋乃萩原あき

はれいふもの

様ゆいふものをいふもの

はれいふもの

すゝあき秋乃萩原わが

よきなり
 かききりりりり
 様々りりりりりり
 お清りりりりりり
 ーりりりりりりり
 かりりりりりりり
 かりりりりりりり
 かりりりりりりり

ーりりりりりりり
 かききりりりりりり
 お清りりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり

寵 或はばるうつと
 ちむりりりりりり

寵 テラ 或本毎名
 從四位上源経女

あききりりりりりり
 おききりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり

あききりりりりりり
 おききりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり
 かりりりりりりりり

さう口訣

さうさうねいふ

我臣さう人の心に

さうさうさうさう

金貨さうさうさう

えいさうさうさう

乃さうさうさう

井さうさうさう

乃さうさうさう

とさうさうさう

とさうさうさう

むさうさうさう

とさうさうさう

とさう口訣

さう人さう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

さうさうさうさう

良岑寺 伯耆守

わかれもふらふら
別とふもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

元河内守

五八

わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら
わかれもふらふら

後藤
中將利基子 斎後右衛門

菅原のちひな

秋乃われを
 秋乃われを

すうしん
つる乃使といじり唐を麗百済より調物をも時勢使と
いふもこれなり使といひ神功皇座三韓とし
け多しは毎年八十艘乃舟に寶物を送りて元嘉乃
直代よりハナシトモほい給くまかり智徳太子持政幸ありとき
隋朝へ使を送りてその遣隋使と名付主は唐代よりなりて
遣唐使乃唐をもちて大使副使判官主典と友を定めこれを
より連こし使を属する承和洋門唐使のなり時建礼門のち
りきく百官の下りりやさきなりこれをめいなるころ延喜序
時よりいふ麗より三れと時々調物ともなり所代子唐の世

ろびりよりほをけらす事ごとくそは南船乃往来す。いなり
ありや。このしゆらもて延喜まゝとあり

秋中乃ともよきなり
三つと別建なるに睦
ぬさひり無病人を
いんとぞ秋中とふ

秋中乃ともいにしめよく別建なるに
平らものとあり
毛規 龍人な遠野

平らものなり

秋中り乃るもにしもゆく物なり
それぬおひりきやわらん

原乃さねりけうしゆあんそ

まゐるゝ町より山崎まで別所

今更に

自女江に遊女
大江至關女部類

いぢりふあまふ
余のあまふわ
われのあまふ
和歌訣

わらふやうなふし
ありわらふやうなふし

神さひなりきり
 神南備山いぢぢぢ
 是い山海乃南
 同名なり今んぢぢ
 乃森とさふ
 人なりなるぢぢぢ
 人なるなるぢぢ
 乃とさふぢぢ
 ゆんと人なりなる
 にはあふ人のや
 左近やとさふ
 あり一様所洗子
 ちとてぢぢぢ
 あり同思歎とさふ

山海より神さひなりきり
 に人なるぢぢぢ
 ぢぢぢ
 人なりなるぢぢ
 いぢぢ
 源さね
 實信康子
 後舒子

是いなるぢぢ
 名ぢぢ
 れとさふ
 ぢぢ
 らな

ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ

ぢぢ
 ぢぢ

源さね

ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ
 ぢぢ

さまとてそもも
 なを可きといふ
 ことあらうと
 かのうといふ
 いふといふ
 ありといふ
 ちうといふ
 ねと読

花乃をまされよ
 ことあらうと
 かといふ
 仁和乃
 時り
 おう
 何く
 りも

兼蔵法師
後醍醐天皇
或作嘉人

秋露乃花をいふ
 秋の露をいふ
 ちうといふ
 ねと読

何ひん人なる
 ありといふ
 と何ひん人
 ちうといふ
 ねと読

かん
 おか
 あ
 り
 さ
 兼蔵

秋露乃花をいふ
 ちうといふ
 何ひん人
 兼蔵

ちむしうきさ
 ゆへんれに様
 なるふりわれ
 こころをれう
 ひよてりきつ
 山井乃る様
 むすふふわれ
 あくがりの
 よきくわて
 今うわれぬ
 ありわりの
 といふとよ
 につけり丸
 引よれい
 せいしめやあ

[illegible]

いふにほろちの　　いふにほろちの
すいほうふふふふ
と本まゝくよめわに
是ハ實之第一乃秀奇なり
是のめい乃なるく　　いふにほろちの
ハ第一なり　　いふにほろちの
東常なり　　いふにほろちの
ハ第一とよめわに　　いふにほろちの

くまげやうををんくすのた
まわぬくをんくすのた
をわんくすのた
よる今を在原葉朝臣
わんくすのた
くまげやうををんくすのた
まわぬくをんくすのた
をわんくすのた
よる今を在原葉朝臣
わんくすのた

ておひきかきおきりあくとちて
 やふりうらとておひきく
 ねにわくはるやあうのれれ
 ねにわくはるやあうのれれ
 すふふふふふふふふふ
 人あふふふふふふふふ
 ときふふふふふふふふ
 乃ふふふふふふふふ
 ねふふふふふふふふ
 へふふふふふふふふ

きんしんきんしん
張はちふらとら
雲のまのまのま
あまのまのまのま
まのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま

あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま

千代ね

あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま

千代ね

あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま

千代ね

あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま
あまのまのまのま

夕月あはれつるまゝといふ人ゝあはれ玉うけのまゝあはれよ
まゝとて玉枝玉垣するものゝ二見の圖をわけても見え
いふ人ゝいふにけしきも并也二見の圖は但馬掃磨のいふ
伊勢よりいふ玉枝玉垣の掃磨

待つて七夜は
掃磨して天の原
まゝこれいふ七夜
あはれ玉と云ふ
あるはまゝいふ
片も也二見の掃磨

これよりいふ玉枝玉垣の掃磨
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ

在原重平卿

手あてはかやう
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ

あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ
あはれ玉と云ふ

すゝの御

院よりあす
あそいぬええ
はるにほきぬ
うらうらに
えいこも向ふ
あそいぬええ
こも向ふ
いふ葉子
はるにほきぬ
うらうらに
えいこも向ふ
あそいぬええ
こも向ふ

このいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ

たれ七

いふ葉子
はるにほきぬ
うらうらに
えいこも向ふ
あそいぬええ
こも向ふ
いふ葉子
はるにほきぬ
うらうらに
えいこも向ふ
あそいぬええ
こも向ふ

古今和歌集巻第十
物名
うらうらに
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ
あそいぬええ

小野儀彦掃部頭
あきけり

けいひき乃山より離
 りて乃山より離
 こゝくにありてね
 世をくちとせむ
 定をうき世とせむ
 けいひき乃山より離
 けいひき乃山より離
 玉の末よりやうき
 あり 古今ニヤタの
 一也 徳機よりバ
 秋きぬきハ今や難

けいひき乃山より離
 やり乃山より離
 世をくちとせむ
 けいひき乃山より離
 玉の末よりやうき
 あり 古今ニヤタの
 一也 徳機よりバ
 秋きぬきハ今や難

の巻 風のまはし
 けいひき乃山より離
 けいひき乃山より離
 玉の末よりやうき
 あり 古今ニヤタの
 一也 徳機よりバ
 秋きぬきハ今や難

けいひき乃山より離
 やり乃山より離
 世をくちとせむ
 けいひき乃山より離
 玉の末よりやうき
 あり 古今ニヤタの
 一也 徳機よりバ
 秋きぬきハ今や難

わすれにけさうひもうえつゝむねを
あはれもものゝけうらな

孝子

子と露を玉とわくもやさうふの
 花ももたうと糸をみなす
 朝花ゆをわけうわちつむさんと

郭けゆをわけうちつむんと

いづのやまをみふとありぬる

朱雀院乃常寂光合せ乃時よき
あつとよふを事を白なり
とたてよき

をたてよめる
はるゆき

とうやまふねさう——あゝあゝ
へうけん秋とあるひさうあるさ

きくらうたれ　さしめり

秋ちうのもありまかり白虎の
とくさきあもしるうりゆく

馬子
讀人馬子

わやと乃花女 花女をきく音やん野方なるの我なり
うと之 龍膽花也 玄一うかきうきうきとく花のとほる
と花女ハううん乃花やううはきうととわううやうとさ
くうととら

けりやとる花のみ 花のみ ちるゝ香打えん 野乃るまゝの我わづ
 ころとく 龍騰りゅうたう 花也 立一う ちるゝやうやうとけ 花のとほる
 花も花はうゝえん 乃花やうう 花もてゝとちるゝやうやうとさ
 けりやとる

切てうつせふ衆と
 いふとぢりひます
 といふやとて

古今事考

如くうつせみの世と
 いろとありけりす
 つきあやと

や、乃名實

一、露乃降る年
 をやそこのや
 乃のふをそこのや
 是より濃也死

亭午子也
有^レ佳^ク黃白^ク
訓^ハ呼^フ蓀^ヲ曰^ク朝^ノ顏^ニ
とすあやめ^ノと
上^リ所^ニ來^ルハ詩^ハ乃^ハ心^ヲ撰^ル

うもゝる乃夢をうも
 現うゝふらうねを
 夢をうもらうねを
 とてかゝらうとて
 も亦古今三舞の
 秘事とてり侍候
 の上やうてさす
 花乃つらうとて一感
 花のまゝに共とてり
 うもゆれとて青
 く霞うらめとて
 日花乃かづとて
 ちと乃かづとて
 てさうとて
 うもとて

かゝるさ。ゆや
 うもゝる乃夢をうも
 現うゝふらうねを
 さうりけ
 花乃つらうとて
 かゝるさゆめけ。

とてさうとて
 花乃つらうとて
 花のまゝに共とて
 うもゆれとて
 く霞うらめとて
 日花乃かづとて
 ちと乃かづとて
 てさうとて
 うもとて

いのちさうとて
 うもゆれとて
 かゝるさゆめけ。
 うもゝる乃夢をうも
 現うゝふらうねを
 さうりけ
 花乃つらうとて
 かゝるさゆめけ。

花よりかはるるは乃ち去るるをまゝゆく阿保をいひて候ちて花
 と是すに候る事いとていふ事には内名をたふ近江奉行と
 今の事ありあり

阿保經覽 主税所右筆

かろまろ

波の形のものね

二 彼方より

厚不方而如
足口訣

波乃飛汗のちぎて

乃風乃

あゝ波の花に

三咲ちりる

うゑにわつるを

新島啓士

かたうまにうすきまわらん
あちいあもものうさけ

七十九

あをの泣ね

阿保經覽 主稅功古案

伊勢

波乃花おきうしきそあふやう

ふのすとも風やちるん

琴堂

作學

うゑ玉乃わろろろやわろ

如子乃けり上るる云

五

何處乃山王峯八景亭

系世より時を

如野

子翁

なま乃う 念けね ねまふれ

いづれなるかきわり心

二乃

子

源
正
長
五
十
五
年
春
月
日

おれと月乃が了のみやある。

ひまわり

のちまき方をれ
種をまきやけに
苗乃をれしれ
こつうしりい
ぬしりりりり
れを思ふる母の

そふちあつち
月ふあやそ
弟の中をふ
けはさうたふ
ふちりねふ
狂言歌

ちまき

大江山

のちまき乃をれしりあふるなふ
けはさうしりい
ふちりねふ
めをけしりあふるなふ
いひなれふふ

僧山 聖宝 先仁寺末
恒藤寺

そふちあつち
こつうしりい
ふちりねふ

